

人間は考える——雲を括る

山田 仁 准教授

(イギリス文学)

イレネオ・フネスは有史以来世界で発生した全ての出来事を憶えている。ホルヘ・ルイス・ボルヘスによる「記憶の人、フネス」。フネスにとって「包括的な『犬』という記号が、さまざまな大きさや形をした多くのことなる個体をふくむということが理解しがたいだけではない。三時十四分の（横から眺めた）犬が、三時十五分の（前から眺めた）犬と同一の名前を持つことが気になった」（『伝奇集』158-59）。フネスは個別で世界を把握する。彼の記憶は個別がすし詰め状態にある。

サヴァン症候群savant syndromeは特定の分野で超人的な能力を示す。○年△月×日が何曜日かを的中する、分厚い本を一読で完璧に暗記する、一度聞いた曲を誤りなく演奏する、航空写真を一瞥するだけで正確に描き起こすなど。サヴァン患者の超人性は記憶力と再現力で現出する。サヴァンは記憶に定着した個別を概念化し抽象化する能力を欠く。

各々の犬は様々な個性を有する。人間の思考は個性を無視して「犬」という概念で括る。別の時間に別角度から見ようとも「犬」として概念化する。「考える」とは一般化し抽象化することである。人間の脳は括らなければ考えることができない。

人間が個別を括り概念化する仕方は、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインの教えるところである（『哲学探究』61-62）。「関学生」を例に採ろう。世間は「関学生」という言葉で何をイメージするか。「おしゃれ」「お坊ちゃま・お嬢様」「美男美女」「海外志向」「ほどほどに頭が良い」など。そのイメージに共通する特徴はあるか。ない。各々のイメージは個々の関学生に該当したりしなかったりする。Aという関学生は「おしゃれ」で「頭が良い」が、「お嬢様」でもなければ「海外志向」は薄い。Bはイケメンではないが「おしゃれ」ではある。Cは「海外志向」が強いが「頭は良くない」。ヴィトゲンシュタインは多くのイメージは重なり合い交差しながら複雑なネットワークを形成している、そして個々のイメージは共通する唯一の特徴で括られはしない、寧ろ個々のイメージのいずれか一つ乃至は複数の特徴を共有していればその大学生は「関学生」として緩やかに括られると考え、これを「家族的類似Familienähnlichkeit」と呼んだ。人間の思考は個別を括り家族化する。

一方、人間の脳はそれと矛盾した機能をも示す。「雲」という概念を脳裡に呼び起こしてみる。Aは夏空に沸き立つ積乱雲をイメージする、Bは梅雨空を覆う雨雲を、Cは秋空に棚引くうろこ雲、Dは春ののどかな羊雲という個別のイメージを喚起する。人間の思考は個別からしか概念を知覚

することができない。

思考という内的作用からコミュニケーションという社会的作用に議論を展開しよう。「イエス・キリスト」という概念をめぐる対話する。カトリック教徒のイメージするイエス、新教徒のイエス。福音派のイエス、カルヴァン派のイエス、メソジストのイエス。牧師Aと宣教師Bのイエス。概念をめぐる矛盾した脳の働き故に、人間は他者とイエスについて対話する際に各々が異なるイエスをイメージする。話し手は自分のイメージする個別のイエスを相手に強要し、聞き手のイメージするイエスを否定する。聞き手は別の異なるイエスのイメージに固執する。相互理解の齟齬が発生することは不可避である。唯一神を信奉する宗教に神とその子に関する相互理解は不可能である。一神教の神は不和を必然的に胚胎し物理的乃至は心理的力学行使を準備させる。

言葉は人間の相互理解を深める道具ではない。寧ろ言葉は人間の孤立と対立を助長する。我々はバベル崩落以後の存在である。
